

永井道明の第4回オリンピック・ロンドン大会（1908年） 視察について

中 村 哲 夫

要旨：本報告の目的は、日露戦争後のわが国の学校体育および社会体育、家庭体育を視野に入れた国民体育のあり方を示すために、文部省より欧米の体育・スポーツ状況を調査・研究することを課せられ、欧米に留学した永井道明がどのような問題意識をもって、第4回オリンピック・ロンドン大会（1908年）を視察したのか、また視察の結果、オリンピック大会をどう評価したのかを明らかにすることである。

永井の直接の関心は、わが国がオリンピック大会に参加すべきかどうかということである。永井の問題意識の根本には、一般の国民を対象とする「普通体育」と、競技力の高い少数の選手を対象とする「特殊体育」が併立併行できるのかどうかという問題があり、オリンピック大会に参加することによって、「普通体育」が衰退するのではないかという危惧があった。「特殊体育」のみに関心が集中し、「普通体育」がおろそかにされ、その結果古代ギリシャにおいては、オリンピック大会そのものの衰退ばかりでなく、ギリシャの滅亡につながっていったとする永井の危機意識があった。

視察後の永井の判断はどうだったのか。視察直後にはまだ結論は出ていない。帰国後に、IOCがロンドンの次の第5回大会をストックホルムで、次々回の第6回大会をベルリンで開催すると決定したことにより、永井はわが国のオリンピック大会参加を決断した。

その後、永井は、日本のNOCとしての大日本体育協会の創設に参画し、初代の総務理事となり、会長嘉納治五郎を支え、1912年開催の第5回ストックホルム大会へのわが国初参加を導いたのである。

キーワード：永井道明／第4回オリンピック・ロンドン大会／大日本体育協会

1. はじめに

わが国がオリンピック大会に初めて参加したのは、明治45（1912）年開催の第5回ストックホルム大会である。団長嘉納治五郎、監督大森兵蔵、選手三島弥彦、金栗四三の計四名からなる選手団である。陸上競技100m、200mおよび400mに出場した三島は、100mと200mは予選敗退、400mでは予選通過したが準決勝は棄権、マラソンに出た金栗は折り返し地点を過ぎた辺りから意識がなくなり、途中棄権というものであった。ここからわが国のオリンピック参加の歴史が始まる。

しかし、オリンピックに関する情報やニュースは、「明治文化資料叢書 第十巻 スポーツ篇」¹⁾で木村毅が紹介した「少年世界」等の雑誌記事を通して、復興した第1回アテネ大会から、すでにわが国に伝わっていた。だが、オリンピック大会を

見学し、実際に自分の眼で見て紹介したのは第4回ロンドン大会からである。その紹介者は、文学者櫻井鷗村と体育学者永井道明である²⁾。

櫻井は自著「欧州見物」において、7ヶ月に亘ったヨーロッパ旅行の内、4ヶ月を過ごしたロンドンでの様子を詳細に報告している。その中で、1908年開催の第4回オリンピック大会についても記している。櫻井は、この大会が古代のオリンピック競技会の復活であり今回が4回目に当たること、IOCが大会の主催者であり欧州をはじめとして世界各地にIOC委員がいること、参加国は26ヶ国で、アマチュアの選手のみに出場資格がありプロは出場できないこと、そしてスタジアムについても、水泳プールを含み、陸上競技トラックの外側に自転車レースのためのレーンで囲まれた大競技場について書き記している。また、陸上競技や水泳等の競技は7月13日から2週間という

期間で実施され、サッカーやスケートは10月から11月にかけて行われるという大会の会期についても報告している。加えて、同盟国イギリスで開催される大会に日本が参加していないことを、特に残念がった。7月13日に挙行された国王臨席の開会式の様子も詳細に報告し、開会式後に実施された自転車や水泳等の競技を見学したが、櫻井は競技に関してはあまり関心がないようであり、「あまり面白くないので」競技場を後にしたとも記している³⁾。

櫻井は同書において、永井に関しても言及している。「高等師範の永井道明氏は、瑞典から態々英京に来て、二週間の競技から、冬のにまでかけて飽きもせず、熱心に研究した」⁴⁾と、永井は何を熱心に研究したのか、櫻井はこの点については何も語っていない。

永井道明(明治元-昭和25年)は、明治38年、姫路中学校の校長時(永井38歳)に文部省によって欧米留学を命じられ、12月にアメリカに渡りそこで1年半を、その後ヨーロッパに渡り、1年間をスウェーデンの王立体操学校でスウェーデン式体操を学び、後の半年をイギリスやドイツをはじめとするヨーロッパ各国の体育・スポーツの視察・調査に精力的に取り組み、約3年間の留学を経て、明治42年1月に帰国した。留学の目的は、国民体育の奨励方策についてであり、学校体育のみならず、社会体育や家庭体育を視野に入れた今後の国民体育のあり方を示すために、欧米の体育・スポーツを研究することであった。

帰国後、東京高等師範学校の教授になった永井の活躍は目覚ましく、わが国最初の「学校体操教授要目」(大正2年)の策定とその実施・普及に奮闘した。永井は「大正期の学校体育における第一人者」⁵⁾として位置づけられており、従来の永井研究は、学校体育史の視点からのものが専らであった。しかし、永井はオリンピック史研究からも重要な人物である。彼は、櫻井と共にオリンピック大会を見た最初の日本人であり、しかもある問題意識をもって大会を視察・調査した体育学者であった。彼は帰国後に日本のNOCたる大日本体育協会創設に参画し、当協会設立時には初代の総務理事となっている。

本報告では、まず、永井はどのような問題意識をもって第4回オリンピック大会に臨んだのか、次に、彼は自らの問題意識からみて、オリンピック大会をどのようなものとして認識したのかを明らかにしたい。

2. ロンドン大会視察に際しての問題意識

永井は昭和10年に公にされた自伝の中で、第4回オリンピック大会参観に関して触れている⁶⁾。すなわち、留学前にはオリンピック大会についてはほとんど聞いたことがなく、最初の留学地であるアメリカにおいて、体育関係の歴史書や体育関係者との話の中で知り、ちょうどヨーロッパ滞在中にロンドンで大会が開催されることを聞かされる。これを好機とみて、永井は「何といふ幸だらう。どうしても見て置かねばならない」⁷⁾と思ったという。永井は開会式前日の7月12日に、ロンドンに到着した。翌日から2週間の夏の競技を視察し、その後8月にはドイツを訪問、再度10月にロンドンに引き返し冬の競技を視察した。永井にとっては初めての国際競技大会であり、深い印象と大きな感銘を受けたようである。

永井にとってもっとも大きな関心事は何だったのか。彼は回想し、「当時余に取り我国に取り最大の問題はオリムピック大会の将来、特に我が日本の参加すべきや否やの事項であった」⁸⁾と記している。オリンピック大会への参加に関して何を問題としていたのか、オリンピック大会の国際親善や競技の発展といった面からの利益は何も疑うことはないが、永井は、オリンピック大会への参加が国民体育の進展に利益があるのかどうか、参加が却って国民体育の進展に不利益を及ぼすことはないのか、という問題であった。永井は次のように回想する。

オリムピック大会の国際親善の効果や競技体育進展上の利益は誰しも疑ふものはなかったが、其の全国民の普通体育としての永遠性から見て其の将来果して如何は欧米の体育史論家にも議論があった。特に全国民多数の普通体育と少数選手の特種体育とは併立併行すべ

きや否やは、有識者体育家の間にも可否両様に岐れて居た。全国民体育の一大国である独逸が一八九六年第一回以来参加して居ないのは余の研究には重大の疑問事実であった⁹⁾。

永井特有の言葉が使われている文章であるが、老若男女の一般の国民を対象とした「普通体育」と、競技能力に優れた一部の選手を対象とした「特殊体育」は、一国において、両立できるのかどうかという問題である。「普通体育」の広い基盤の上に「特殊体育」が成立し、一国を代表する選手がオリンピック大会に出場し活躍し、そして、選手の活躍がいつそう「普通体育」の裾野を広げ、その発展に寄与し、ますます競技力を有する選手が出現し、「特殊体育」も発展していくとする好循環のシステムが成立していけば良いが、オリンピック大会に参加することによって「特殊体育」のみが発展し、一般の国民はそれを見るのみであり、「特殊体育」が発展すればするほど「普通体育」は衰退するのではないか、そもそもこの両体育は互いに反発し合うのではないかという懸念である。

上で引用した永井の文章にはドイツの事例が挙げられているが、その後に続く文章の中で第4回ロンドン大会を参観した際のドイツの参加形態を、永井は、「倫敦の大会に於ても独逸は個人（インデヴィデュアル）としてはやって居たが国民代表ネーションとしては参加して居らなかった。独逸巡遊の際親しく彼地の諸大家に就て其の意見を尋ねたが矢張り賛否両様であった¹⁰⁾」と記している。永井にとって、「普通体育」と「特殊体育」の関係が大きな問題意識として挙げがっていたのである。この問題意識を解明するには、欧米留学時における各国のスポーツ状況を永井はどう見ていたのかということが重要となるので、この点について次に確認してみたい。

3. 永井による欧米のスポーツ状況理解

永井は、日露戦争後の戦後経営の一環として、日本の国民体育の奨励方策を確立するために、欧米における学校体育ならびに社会体育全般に亘り研究する目的で、まずアメリカに向かった。それは、

政府・文部省の国立体育研究所の設立構想のもと、これからの日本の体育の進むべき方向を研究するために参照すべき欧米の体育・スポーツ研究なのであった。

永井は帰国後、講演や雑誌への寄稿を通して欧米の体育・スポーツ状況を報告している。雑誌『体育』に載った「欧米留学の回顧並に体育界の状況¹¹⁾」と題した文章において、欧米の体育の趨勢として、永井は、(1)文明が進むとともに、体育が一般の人々にも必要不可欠なものとなり、この認識が広がっている国々では設置主体の公私は別として、さまざまな諸団体が都市の中に組織化され、体育施設を設け、一般の国民たちが積極的に体育活動を行っていること、(2)何れの国でも学校および社会の体育とともに、「体操と遊技」とが並立して行われていること、(3)遊技と並立する体操の中心は、ドイツ式体操からスウェーデン式体操に移行していること、(4)遊技が専門的になりすぎて、勝敗が重視されるようになり、また「商売的」になり、「心ある世界の体育家の憂ふ所」となっていること、の4点を挙げている。

(1)に関していえば、文明化が進めば進むほど、生活の中の体育的な活動は減少し、身体を養う機会も少なくなることから、特別に身体養成の手段や機会を設けなくてはならないということである。「吾人の身体をして現時の状態に適応せしむる目的を以て、人為的に努力する所の特別の仕事¹²⁾」と体育を定義する永井にあっては、文明の発展した欧米諸国において、公立・私立の各団体あるいは国家が社会事業政策として体育ができる環境を整備し、国民がその実践に励んでいる様は羨望的であった。

(2)に関しては、ここで言う「遊技」とはスポーツのことであり、ドイツやスウェーデン等の近代体操が誕生した国でも、学校ならびに社会体育において取り扱う運動は、体操とスポーツの両者であり、またスポーツ発祥のイギリスでもこの傾向は変わらないことを報告している。

(3)に関しては、スポーツと並立する体操であるが、スウェーデンはもちろん、その他のヨーロッパ諸国やアメリカ、またドイツ体操を誕生させたドイツにおいても体操はスウェーデン式体操を重

視しており、この傾向は欧米諸国で変わらないというのである。

(4)に関しては、スポーツの弊害に関してである。競技性を中心的特性とするスポーツは、当然勝ち負けが伴い、その結果過度な競争意識が生じ、このことが体育の方法として位置付いているはずのスポーツが、体育や教育の範疇から逸脱することへの懸念である。「勝敗の如きは一種の方便」¹³⁾とする永井は、これが目的となり、学校内においてもスポーツを専門とするチームが作られることを憂うのである。本報告は、この(4)の論点に関わる。永井は欧米のスポーツの状況をどのように理解したのであろうか。次にこの点について見ていきたい。

帰国半年後の明治42年7月10日に行われた全国中学校長会議における講演¹⁴⁾において、永井は「遊戯」を、「慰乐的にやる軽いもの」と「之を以て英吉利国民の如く紳士たるの素養を与へると云ふやうな訓練的のもの」の二種類に分けている。「遊戯」というと遊びじゃないかと思われがちだが、決してそうではなく、教育や体育の方法として極めて有用な運動としながらも、特に正課の体操科で取り扱う場合には種々の注意が必要と言う。もちろん、ここで言う「遊戯」とはスポーツのことである。

永井は、欧米諸国のスポーツを三つに分類している。一つ目は、「商売的にやっている」いわゆるプロフェッショナルなスポーツである。このスポーツの目的は「飯を食ふにある」ので、われわれ教育者は多言を要しない価値のないスポーツであると言う。二つ目は、「勝敗を主として居る」スポーツであり、「勝ちさへすれば宜い」というスポーツのやり方である。このようなやり方はアメリカに見られ、特に西部の方で多く見られる。このようなやり方は、「商売主義」のスポーツよりは一歩進んでいるが、「非教育的」であるとし好ましいものではないと言う。三つ目は、「勝敗以上のこと・・・即ち目的を訓練に置いて・・・勝敗以上に、精神上のことを主としてやる」スポーツである。イギリスやアメリカ東部の大学ではこの精神で行われており、日本でもスポーツの行い方として、この三つ目の精神でもってスポーツを

行う必要があると、永井は言う。

また、帰国直後に行われた別の講演¹⁵⁾で永井は、イギリスのスポーツ精神を「国民一般の天性」と称し、国民全階層にわたって「気高いところを求めて楽しんでいる」と、イギリスのスポーツを称賛している。一方、アメリカのスポーツは、勝利を求めて研究・工夫を進めていることには感心しているが、その結果として、「チャンピオンは多くの遊戯者から選むといふ選手では無くて専らこれを職とする専手」になってしまっていると、批判的に言及する。アメリカのスポーツを、少数の者が行い多数の者は見て楽しむのみであり、一方イギリスのスポーツは、多数が試み多数が楽しむと好意的に紹介し、アメリカの良識ある関係者もこれを憂い改善に努力しているが、ますます「専門的、商売的に傾いている」と報告している。

永井は、体育の方法としてスポーツを取り入れることについて認めており、またこれが世界の流れだとして、わが国もこの流れに遅れないようにすることに注意を向けている。スウェーデンやドイツといった近代体操の誕生地においても、学校ならびに社会の体育では体操とスポーツが併用され、特にスウェーデンは第4回オリンピック・ロンドン大会においてメダル獲得数で第3位となったことに対して、永井は高く評価している。

しかし、永井にはスポーツに対する危惧があった。アメリカ的なスポーツが世界に蔓延すること、また日本のスポーツにも影響することである。ここで取り上げられるのは、古代のオリンピック大会である。古代ギリシャのオリンピアで千年以上継続されたオリンピックがなぜ崩壊したのかという点である。永井は古代オリンピックが、「当時弊の極まるところ、勝敗に重きをおき、僅少数の選手に一国の運命を荷はすといふ如き間違った考を起すに至ったのは、歴史の証明する所」だと述べる。すなわち永井にとっては、オリンピック大会は、「その発達のさせ様即ち方法の如何によりては、善にも悪にもなります」¹⁶⁾と問題提起をし、復興されたオリンピック大会がこの過ちを繰り返さないのかどうか注意すべきであり、「自分も為にわざわざ倫敦に赴き観察した」¹⁷⁾と語っている。

4. 永井のロンドン大会視察の意図とその評価

永井は講演や寄稿の中で古代ギリシャのオリンピック大会についてたびたび取り上げているが、それらは一つのパターン化されたかたちで言及されている。先ほども示したが、一部の限られた者だけからなる体育がいかなる弊害を生じさせるのかという事例として、古代ギリシャが取り上げられる。ギリシャ民族は、初期のオリンピック大会の時代から多数の者が体育に取り組み、身体を鍛練し、精神を融和してきたことにより、大いに発展してきたが、しかしオリンピック大会がこの心身を訓練をするための「方便」であることを忘れ、運動そのものに熱中し、勝敗に重きを置くことになると、能力のある一部の者の特殊な練習が必要になり、少数の者のみが体育を行い、その他多数の者は「傍観者」の立場に追いやられることになり、オリンピック大会が民族統一の機能を失い、一部の競技者のみが行う見世物に化し、運動の「専門家、商売人」も出現し、多方面からの弊害が現れ、「廃頹滅亡」に至ったというのである¹⁸⁾。

永井にとっては、その国が発展するのか衰退するのかは、その国の国民多数が体育を行っているのかどうかに係っており、これは歴史的事実であるのである。だから、ギリシャの歴史を繰り返さないためにも、日本のオリンピック大会参加の可否は慎重に見極めなければならなかったのである。

では、ロンドン大会視察後の永井の結論はどうだったのか。「一方には頗る結構であるが、又一方には大に考へものであるといふ、二様の感を抱いた」¹⁹⁾と永井は述べている。自伝によれば、視察の中で参加論に傾いていたが、最終的な結論は「四年後の宿題」として、彼は帰国したのである。永井帰国直後のこの時点では、結論は出していない。しかし、永井は現実として、明治42年1月の帰国の後、明治44年7月の大日本体育協会創設に尽力し、当協会3名の総務委員の一人として会長嘉納治五郎を助け、第5回オリンピック・ストックホルム大会（明治45年7月）へのわが国初参加を導いた。

こうした事実からすれば、「我が日本の参加す

べきや否や」という問題を研究するためにロンドン大会に臨んだ永井は、帰国直後にはまだその結論を出すに至っていなかったが、その後の経緯の中で「参加すべき」という結論を出したということである。何がそうさせたのか。永井にとっての判断材料は、オリンピック大会がいかなる国で開催されるのか、IOCがどう決定するのかが大きな意味をもっていた。永井の留学時には、ロンドンの次の大会の開催候補国としてイタリア、ドイツ、スウェーデンが挙がっていたが、永井はドイツとスウェーデンに注目していた。すなわち、両国ともに近代体操の発祥地であるが、スウェーデンの方が、ドイツよりも早く従来の体操に加えてスポーツを取り入れたという。この成果が、英米に続くロンドン大会における第3位というスウェーデンの成績であった。一方ドイツにおいては、ドイツ体操の伝統が強く、スポーツに対して批判的な態度が見られ、オリンピック大会にも冷淡だったという。

このように両国を理解し、永井は、次のオリンピック大会が果たしていかなる国で開催されるのかに関心があつた²⁰⁾。特にドイツに関心を示し、永井は、「普通体育」が普及しているドイツの首都ベルリンでの開催となれば、当然大会の受け入れ国としてドイツが、「従来不参加の態度を改め奮って参加の国論」とならねば大会の招致が実現することはなく、「国論が全国民普通体育と特殊選手体育との併立併行を認めた事実を示すこと」²¹⁾であると言う。帰国後に第5回大会と第6回大会の開催都市が、それぞれストックホルムとベルリンに決定したことを知り、永井は「余の宿題は直ちに解決」したと述べ、「事實は最大の雄弁」と記した²²⁾。ヨーロッパの偉大な体操国であるスウェーデンとドイツをモデルとする永井にとって、ストックホルムとベルリンが次回および次々回の大会の開催地に決定したことの意味は、自らの宿題を解決する上で、大きな意味あることだったのである。

その後、永井は大日本体育協会創設のために尽力する。明治44年春、第1回目の会合、その後2回目の会合を開き、明治44年7月に大日本体育協会は創設した。オリンピック大会とはどのような

ものか、すなわち、その来歴と現在までの歴史、制度、各国の参加の様子、わが国の参加に向けた諸事項等、会合において提出された資料は、永井が留学において調査研究し、ロンドンで視察した情報から作られたものである²³⁾。そして翌45年に、大日本体育協会は日本のNOCとして、第5回オリンピック・ストックホルム大会に初めて2名の選手を派遣したのである。

しかし、その後のわが国のスポーツの進展を見れば、永井が期待した「普通体育」と「特殊体育」の併立併行は実現しなかった。ストックホルム大会参加以降、国内外に示されたわが国のスポーツの発展、「特殊体育」としての発展は特筆に値するが、それが国民の体育・スポーツ、すなわち「普通体育」に好影響を及ぼすことはなかった。むしろ反対に、永井が懸念するアメリカ的な傾向を孕んだスポーツとして展開することになったのである。このことが問題となったのは、それまでのわが国のスポーツのあり方が「競技本位」「選手本位」あるいは「記録本位」と批判され、ストックホルム大会参加以降のスポーツ、すなわち「特殊体育」を担ってきた大日本体育協会が批判されはじめた昭和戦時体制を前にした時であった²⁴⁾。

5. まとめ

本報告は、永井道明はどのような問題意識をもって第4回オリンピック・ロンドン大会に臨んだのか、また、彼は自らの問題意識からみて、オリンピック大会をどのようなものとして認識していたのかを明らかにすることである。結果は以下の通りである。

1. 永井の問題意識は、日本がオリンピック大会に参加すべきかどうかであり、その判断のために第4回オリンピック・ロンドン大会を視察した。
2. 永井は欧米のスポーツ状況を、(a)プロのスポーツ、(b)勝敗を目的とするスポーツ、(c)教育を目的とするスポーツの三つに分類した。
3. 永井は、一般国民を対象とした「普通体育」と、競技力のある少数の選手を対象とした「特殊体育」の併立併行を理想としたが、もしわ

が国がオリンピック大会に参加すれば、そのことがわが国の「普通体育」を衰退させかねないか危惧していた。

4. 近代体操の誕生した国であり、また「普通体育」の二大国であるスウェーデンのストックホルムおよびドイツの首都ベルリンで、第5回大会と第6回大会が順次開催されることが決定し、永井はここにオリンピック大会が「普通体育」と「特殊体育」を併行併立させる可能性を見出し、わが国のオリンピック大会参加を判断した。

(注)

- 1) 木村毅編「明治文化資料叢書 第拾巻 スポーツ編」風間書房、昭和37年。
- 2) 大日本体育協会の2代目会長であり、IOC委員となった岸清一も、第4回オリンピック・ロンドン大会を参観している。岸同門会編「岸清一伝」岸同門会、昭和14年、187頁。
- 3) 櫻井鷗村「欧州見物」丁未出版、明治42年、99-104頁。
- 4) 同上、101頁。
- 5) 前田幹夫「大正期の学校体育の研究」不昧堂、平成6年、37頁。
- 6) 永井道明「余が六十八年間の体育的生活と其の感想」田中寛一、寺沢巖男編『師範大学講座 体育 第五巻』建文館、昭和10年。
- 7) 同上、30頁。
- 8) 同上、30-31頁。
- 9) 同上、31頁。
- 10) 同上。1896年に始まった近代オリンピック大会への参加の仕方は、第1回大会から第3回大会までは、クラブや個人単位で参加していたが、現在のように各国内にオリンピック委員会(National Olympic Committee, NOC)を設置し、NOCが派遣母体となることになったのは第4回ロンドン大会からであるので、なぜドイツは個人として参加できたのかどうかは不明。
- 11) 永井道明「欧米留学の回顧並に体育界の状況」『体育』第205号、明治43年2月。

- 12) 永井道明「学校体操要義」大日本図書，大正2年，3頁.
- 13) 前掲，永井「欧米留学の回顧並に体育界の状況」.
- 14) 永井道明「中学校に於ける体操，遊戯，擊劍及柔道」『帝国教育』第328号，明治42年11月.
- 15) 永井道明「欧米に於ける体操及遊戯の一斑」『帝国教育』第320号，明治42年3月.
- 16) 永井道明「最近欧米各国に於ける学校体操の趨勢」『体育』第185号，明治42年4月.
- 17) 前掲，永井「欧米に於ける体操及遊戯の一斑」.
- 18) 永井道明「我国体育の維新」『体育講演集』健康堂，275頁.
- 19) 前掲，永井「欧米に於ける体操及遊戯の一斑」.
- 20) 前掲，永井「欧米留学の回顧並に体育界の状況」.
- 21) 前掲，永井「余が六十八年間の体育的生活と其の感想」，31頁
- 22) 同上
- 23) 大日本体育協会編「大日本体育協会史 上巻」大日本体育協会，昭和11年，17-18頁
- 24) 昭和戦時体制を前にしたわが国のそれまでのスポーツに対する批判については，拙稿「“スポーツ純粹論”の崩壊」『スポーツ批評』No.1，昭和62年2月を参照.

The inspection of the 4th Olympic Games in London of Nagai Michiaki

Tetsuo NAKAMURA

This study is to make it clear with what kind of problem Michiaki Nagai inspected the London Olympic Games in 1908. The result is as follows.

1. Nagai investigated the London Olympics for the judgement whether Japan should participate in Olympic Games.
2. Nagai classified European and American sports circumstances into three; (a) professional sport, (b) victory for its object, (c) education for its object.
3. Nagai expected that “ordinary physical education” on which the general people work and “special physical education” on which small number of athlete works resist each other. He worried that “special physical education” may make “ordinary physical education” decline by Japan’s participating in Olympic Games.
4. Nagai was glad that the Olympic Games is going to be held in sequence in Sweden and Germany where “ordinary physical education” is widely usually used. Nagai decided Olympic Games participation of Japan from this point.

Keywords: Michiaki Nagai/ Olympic Games/ Japan Amateur Athletic Association